

7 月泉の会 直子先生のお話

——こどもたちの存在そのもの(being)を大切にする保育——

こどもの成長を「できるようになったこと＝doing」で判断しがちですが、それだけでは見落とされる部分があります。できなくなったことや、苦手な行動にも、その子の「存在(being)」が現れており、全ての行動には意味があります。私たち保育者が今年度重点テーマにしているのは、目に見えることの奥にあるこどもの存在を深く見つめる心の目です。

例えば、ひまわり組が取り組んでいる組体操では、最初は憧れや興味から始まりましたが、できなかった技ができるようになり、先生にしっかり褒められる度に、自信や意欲や集中力が育っています。良い行動(doin)には、多くの効果が生まれます。でも、時にはふざけたり、やりたくない……といった、消極的な行動(doin)が見られる場面もあるのです。それを単に「できていない」と否定的に捉えるのではなく、「何故ふざけるんだろう？」と考えると、そのこどもならではの姿や特徴(being)に気付くことができ、こども自身に向き合うことができるのです。こどものすべての行動には理由があるので、それを理解しようとする姿勢が、心の目で見るとのことなのです。

児童心理学者・田中哲先生の著書『コミュニティで支える心の育ち』では、「こどもは意味のないことは一つもしない」と語られています。こどもたち自身も気づいていないかもしれませんが、こどもは理由があるから行動しているのです。わたしたちは、こどもたちを評価(doin)する時、周りと比べることを否定的に捉えがちですが、『共同体(社会)』の中では、人と自分ではできること(doin)が違っているのは当たり前のこととして受け入れ合い、むしろ違いを認め合えるようになることで、お互いが特別な存在(being)であることの気づきが生まれ、違う役割を担い合える『共同体』の一員として共に成長できることが素晴らしいと思います。

善隣幼稚園も、『共同体』だからこそできる多様な『経験』を大切にしていますが、『経験』があればそれで良いのではなく、その『経験』を通して、共通の『感情』を育てることが大切です。この、『感情』を表す『きもちことば』が、小学生の間でも十分に育まれていないために、互いの『感情』を上手く伝え合うことができず、トラブルに発展してしまうことが問題になっているようです。最近の「やばい」という多くのニュアンスを持つ言葉を簡単に使って済ませてしまう傾向も気をつけなければなりません。

金田一秀穂氏監修の『きもちのことばえほん』では、昔話の中で使われる豊かな気持ちを表すことばを例にあげて、自分の『きもちことば』を豊かに育むことを勧めています。絵本や物語を読み聞かせる文化的な活動は、こどもたちの『感情』と言葉をつなげ、心の成長に繋がるとも大切な時間です。

保護者や保育者が心の目を持ってこどもたちに寄り添うことによって、「自分らしくいられる(being)場所」が生まれます。新しく完成した善隣幼稚園のパンフレットでも、その願いを込めて園長のコメントに「こどもらしい居場所」というタイトルをつけました。

最後に、わたし自身も 90 歳の父と暮らす中で、年を取るとできなくなることばかりでなく、できるようになることもあると実感しています。人は年齢に関係なく、日々変化しながら生きている存在です。だからこそ、こどもも大人も、「存在そのもの」が尊重される場を、共に創っていきたいと思います。